

日本組織培養学会

昭和59年7月30日発行

会員通信

第53号

発行責任者

沖垣 達(重井研), 常盤孝義(岡山大・医)
三井洋司(老人研), 大野忠夫(放医研)
間中研一(独協医大), 喜多野征夫(阪大・医),
大島 浩(大阪歯大)
岡山市鹿田町2-5-1 (〒700)
岡山大・医・癌研病理
電話 0862-23-7151

§ 第57回日本組織培養学会 総会議事録

日 時 : 1984年5月25日(金)

場 所 : 高知放送会館

議 長 : 喜多村 勇 第57回研究会世話人

日本組織培養学会第57回研究会に際して、開催された定例総会において、新会長挨拶、新任幹事紹介に引き続き以下の議事が審議された。

(1) 新会長挨拶

今期、新任された佐藤会長より挨拶があった(別項参照)。

(2) 新任幹事紹介

佐藤会長より新任幹事の紹介があった。新幹事は以下の通り。

会 長	: 佐 藤 二 郎	会 計 幹 事	: 松 村 外志張
会 長 代 行	: 高 木 良三郎		梅 田 誠*
庶 務 幹 事	: 奥 村 秀 夫	国 際 担 当 幹 事	: 花 岡 文 雄
	西 義 介		菅 幹 雄*
編 集 幹 事	: 沖 垣 達	会 計 監 査	: 黒 田 行 昭*
組 織 培 養 研 究	: 鈴 木 文 雄		難 波 正 義*
誌 担 当 幹 事			
会 員 通 信	: 常 盤 孝 義		
担 当 幹 事	: 三 井 洋 司*		
	大 野 忠 夫*		
	間 中 研 一*		
	喜 多 野 征 夫*		
	大 島 浩*		

高木幹事は会長代行として主に国際担当をする。会員通信の内容を拡充するため会員通信担当幹事を増員した(*印は会長委任幹事)。日本組織培養学会共催の国際細胞培養会議(別項参照)との円滑な対応を計るため、国際担当幹事をおく。

(3) 学会事業報告

会 誌 : 組織培養研究は57-58年度で計4号発行された(大野前幹事)。59年度以降は学会が年1回に減るため、学会抄録として年2度の発行は不可能になるが、特集、他学会の抄録を掲載するなどして、年2回の発行を維持すべく考慮中である(沖垣)。

会員通信：58年度までに52号発行された。5部を保存し、内4部は幹事が保管していく（三井前幹事）。今後、大会が年1回となり、会員交流の機会が減少するので、年3回の定期発行を維持し、情報量を増やすようにしたい（佐藤、沖垣）。

国際学会関係：国際細胞生物学会は、5月現在、56ヶ国、1720題（一般演題：1350、シンポジウムとワークショップ370）の参加がある。内容に多岐にわたるが充実している（沖垣）。

国際細胞培養会議は、来年の9月10～13日の4日間開催。昨日（24日）のプログラム委員会で内容を検討した。シンポジウム、一般講演、ポスターセッション、ワークショップを予定している。会費は3万円の予定（山根）。

(4) 各委員会報告

研究教育システム委員会：フィルム編集のうち「培養の基礎」は完成した。本日、午後懇親会の前に高岡聡子氏（独協医大）がそのフィルムを紹介するので見て、意見を述べてほしい（梅田）。現在出版予定の「細胞成長因子」の進捗状況は、5月下旬に案内書、注文書が出来上り、6月中旬には出版予定。一部、5,800円。Growth factorは現在、hotな話題なので学会員の購読を希望する（大野）。

株登録委員会：JTC株への登録の拡充をはかりたい。代表的な細胞株があれば、JTCに登録してほしい。パテント等の件で問題にならないように留意する（佐藤）。

組織培養辞典編集委員会：文部省の出版助成金は、この辞典が2次刊行物であるため得られなかった。収録項目、関連項目の採取が終った段階である（黒田）。

マイコプラズマ委員会：橋爪壮氏（千葉大）を中心に進められているが、新幹事会でも積極的にとりあげて行く方針である（奥村）。

(5) 会計報告

58年度の決算と59年度の予算について梅田、松村会計幹事より報告があり、了承された（別項参照）。なお、58年度決算報告については前日の幹事会の席上、難波会計監査担当幹事より、問題はないとの承認を得た。

(6) その他

次回研究会について：次期世話人は都老人研の大橋先生の予定であったが、急病になられ、世話人を辞退する由通知があった。については、次期世話人を新たに依頼すべく現在考慮中である。大会の様式についても、従来の形式を変更しようと考えている。これらの事項については出来るだけ早い時期に具体案を示し、各幹事へ通知して検討する（佐藤）。

会則変更について：

奥村庶務幹事より、研究会の年1回開催に関して、経過報告と、それに伴う会則変更の提案があり、総会の議決をもって承認された。変更箇所は、第3条第2項。「原則として年2回研究会を開催し……」が「年1回大会を開催し……」、第12条。「幹事会は、研究会の……」が「幹事会は大会の」および第15条。「研究会に……」が「大会に……」にそれぞれ変更された。

(7) 新入会員紹介

昨年10月から今年5月4日までに入会申込みのあった正会員24名、賛助会員4社の紹介があった。
(奥村秀夫、西 義介)

§ 新会長挨拶

佐藤 二郎

我が日本の組織培養学会の偉大なパイオニアであった勝田 甫先生によって永年培ちかわれて来た古き良き伝統と山田正篤前会長を始めとする前幹事諸兄が試みられた現代への注目すべき対応を踏まへて旧き良き習慣と新しい気風を織りまぜながら未来の日本組織培養学会の理想像に向って、ねばり強く努力精進したいと思います。

時恰も過熱とも思われるバイオテクノロジーへの要望によって日本の組織培養学会の真価が問われようとしています。

我々は平和と友愛の精神のもとに創造力豊かな実力のある培養屋集団として国際社会の中で独自の日本組織培養学会の成熟を期すべき時と思えます。新幹事諸兄と共に微力ながら責任をもって献身する覚悟でありますので御協力をお願い致します。尚、素晴らしい今大会の開催に御努力頂きました高知医科大学喜多村勇教授に感謝の意を捧げて御挨拶と御礼に代へさせていただきます。

§ 第58回研究会のおしらせ

持ち回り幹事会により次回研究会は、世話人を現会長とし、幹事会が協力することになりました。会場については現在交渉中ですが、日程、その他については以下の通り予定いたしております。

日 時 : 昭和60年5月(土、日を除く)

プログラム :

第1日 午 前 : エキスカーション(バス)

午 後 : 1:30~5:30 一般演題

7:00~9:00 ワークショップ

9:00~ 懇親会

第2日 午 前 : 8:30~11:30 一般演題

11:30~12:15 総会

午 後 : 1:30~3:30 シンポジウム

- 一般演題が多い場合は、2会場とし、ポスターセッションを設け、細胞株(JTC)の追加発表等を考えています。
- ワークショップについては、司会進行は出来る限り培養学会会員で実際に実験を行っている研究者2名におまかせしたい。テーマは、無血清培養、成長因子、映画撮影による培養研究、成熟ラット肝還流培養法、マトリックスを応用する培養技法、ハイブリドーマからモノクローナル抗体への技法、自然発癌と oncogene、エイジングなどです。(予定のテーマは以上の通りですが、最終決定は10月に致したいと思いますので、ご希望、ご忠告などがありましたら小生宛ご一報下されば幸いに存じます。)

•会場選定に当っては以下のような条件を考えております。

- ① 箱根周辺で交通の便が良いところ
- ② 250人収容の大会議室を有すること
- ③ 分科会(50人5室)が可能であること
- ④ 250人収容の宿泊設備を有し、出来れば会議と同場所であること(特に分科会場=宿泊場所)
- ⑤ 宿泊料金、会議室使用料金が手頃であること

(佐藤二郎)

§ International union について

6月3日より7日まで、Texas州 HoustonのShamrock Hilton Hotelにおいて第35回米国組織培養学会総会が開催された。会期中の6月6日午後8時より、Round table “Serum-free culture”が行われたが、これに引続きInternational unionに関する話し合いが行われた。この話し合いにはRound tableの話題提供者8名(日本から山根 纈, 高木良三郎, 米国からR. Ham, D. Barns, M. Taub, 欧州からM. Adolphe, H. J. Romijn, D. Grouldjii)の外, McGarrity, K. Sanford, G. Satoなど計10数名が参加し、概略以下の話し合いがなされた。まずDr. Hamより

- 組織培養に関する用語の統一を国際的に検討したい。
- 培養技術の交換を行う。
- 細胞株を相互に分譲する。
- 国際シンポジウムを開催する。

などの提案がなされ、山根博士に意見を求められた。同氏は日本側の立場から

- Internatinal unionの世話人はMcGarrity氏、事務局もアメリカでよい
- 草案がアメリカで作られたら日本側でも充分検討する。
- 結合のゆるやかなものでスタートしてみる。
- 国際シンポジウムは4年に1回位でどうか？

などの考えを述べた。以下

Dr. Adolphe : 賛同、国際シンポジウムは3年に1回では如何か。

Dr. Sanford : かつて、勝田先生が開催されたシンポジウムを例にあげ、経済的な面からも何らかの国際学会のサテライトの形でシンポジウムを持つては如何か。

Dr. McGarrity: それも1つの方法だが、例えば“がん”の国際集会のサテライトとして開催する場合、“Serum-free culture”の様なテーマのシンポジウムが持ちにくくなる可能性はないか？

など主にシンポジウムに関する意見が出された。

会終了後のパーティーでMcGarrity氏と話合った際、International unionの規約はこの秋頃出来上り発送するとのことであったので、受取り次第日本組織培養学会委員会で検討すること、また会員通信の交換を確実に行うことなどを約した。(ちなみに現在米国組織培養学会員は約2,500名、欧州

のそれは約 350 名ということである。)

(大分医大 高木良三郎)

追記：52号の会員通信に関しては、英文抄録とともに Dr. McGarrity (米国組織培養学会会長) ならびに Dr. Adolphe (欧州組織培養学会会長)宛発送済みであり、本号も同様に行う予定です (Dr. G. Sato, Dr. McGarrity, Dr. Adolphe 宛)。なお Dr. McGarrity より International union の日本側委員 2名の推奨を依頼されたので、現幹事の内、国際係の高木良三郎氏と従来からのいきさつから山根紘氏にお願いし了承を得ました。

(佐藤二郎)

§ 第 57 回研究会を終って

山田正篤先生から研究会開催の御依頼の御手紙を頂戴致しまして、成程、四国で開催されたことのないこと、いかに私が培養学会と疎遠になっているかの二つを思い知らされました。

旬日を出ず、高岡先生の第 56 回がひらかれることゆえ、とりあえず出向いて、最近の培養学会のひらかれ方と、開催のためのノウハウを修得のため、独協医大にお邪魔を致しました。あいかわらずザックパランな点、これはまことになつかしく思いました。もう一つは、私が長期不在で、臨床の学会に馴らされたためか、「せまい範囲を深くやっているなあ」という印象でした。

高岡先生からこまごまと前回開催の準備を段階を追ってお知らせ下さり、台所の方もすべてお教え下さったのが、私共の出発の大きな支えになりました。

外人講師の選択では、私が小児科であることから臨床に応用する培養をということで、Prof. Ogra に決めることを迷いませんでした。これは第 56 回の研究会から私の得た印象を具現するためのものでしたが、結果は、功罪半ばした様に思われます。培養を、ウイルス診断に如何に応用するかといった、培養屋にとっては、いわば、各論でなくて、ベッドサイド的な面を論じてもらった点には新しさがあつたと思われませんが、培養と関係のない免疫概論に、ついのめり込み勝ちだったのは彼としては致し方ないとしても、参集会員には招待講演を聴取する礼を強要した感がありました。

シンポジウムは大成功だったと思って居ります。私共のところの内海耕髓教授に御相談した結果「細胞工学的アプローチの現況と展望」という題がすぐに出て来まして、而も、世話人は免疫学教室の藤本重義教授が適任と決まってしまいました。シンポジストはそれぞれに第一人者であり、内容は斬新なものばかりでしたが、残念なことは全員が培養学会のメンバーでないことでした。

東京から、ジェット化されたあとでしたので、四国開催といっても、比較的スムーズにおいで頂けたのではないかと居ります。会場は市の中心部で便利の良いところですが、開会後のスピーカーに雑音が暫く入りつづけていたことには弱りました。予行のとき入らなくて本番で入るのですから始末のわるいことでした。

機器展示は同じフロアの別室が最良の条件でしょうが、一階下になってしまいました。隣の部屋で切り絵の婦人同好の会があったりしまして、シンポジストの一人も、こっちの方をたのしんで居られましたが、田舎での学会というムードが、何となく出てしまいました。

一般講演では、佐藤二郎会長にプログラム編成から大層御世話になりました。山田正篤先生をはじめとして、最近では、御自分で御発表になられない様な御年輩の方が、御自身で御発表になられるケースが多く、後部座席に座って居りました私に、隣席の旧友が、「これは、四国と、貴兄へのおもいやりだ」と、解説をしてくれました。本当にありがたいことだと思いました。討論もなかなか活発で、1題30分が短く感じられました。

総会で、年2回開催の培養学会を年1回とすることが決められました。佐藤二郎会長から、来春には箱根で、学会ではない研究会をする様な御提案がありましたが、四国の今回の第57回研究会が、年1回の最初の思い出深い会になろうとは夢にも思いませんでした。

懇親会の、土佐鶴の樽が殆ど底をみせてくれる程、会員相互の交歓が出来ましたことも、御世話させて頂いた私にとりましては感謝すべきことでした。

今回の準備のため前会長及び現会長、幹事の諸先生方にはいろいろと御指導を賜わり、また献身的に裏方さんをつとめてくれた倉繁助教授以下教室員みなさんに、心から御礼を申します。

(世話人 喜多村 勇)

§ 第57回研究会に参加して

東大・医科研癌細胞 細井純一

はらんぼ、のれそれ、長太郎。数々の珍味に加え、本場のかつおのたたき、鯨の刺身に舌鼓を打ち、初めての四国路に胃袋は満足しています。

初めての培養学会への参加は頭も満足させました。勝田先生らが創立なさったユニークな学会であると以前から聞いており、胸をわくわくさせて会場を訪れたのですが、噂に違わぬ楽しい研究会でした。癌学会のように規模が大きくなると演題は細分化され、会場もばらばらになってしまいます。1つの会場でじっくりいろいろな話を聞けるのはとてもすばらしいことです。

シンポジウムでは、組織培養を用いた研究が応用、発展されていく姿を見ました。谷口先生は、メラノーマ細胞に対するモノクローナル抗体が臨床診断に有効であり、さらに転移を抑制すると発表されました。癌細胞の性質を探り、各方面に応用するには、組織培養は不可欠の手段となっています。

また、化学発癌とともに発生や分化に関心があるので、黒田先生や久保西先生などの発表も興味深く聞きました。昆虫が幼虫期を経ずに一足飛びに成虫になれるとしたら単純で良いと思うのですが、これでは季節の変化に対応できないのでしょうか。PL-21は分化の誘導できる癌細胞。トランスフォームできる3T3正常細胞との違いは何なのでしょう。

このように広範囲の研究をおもしろく聞けるのも1人30分もの発表時間が与えられているからこそだと思います。やはりこの研究会は、今のスタイルを維持してほしいものです。

アットホームな懇親会で会長から伺った研究者としての心構えを守りつつ研究に励みますので、みなさんよろしくお願ひします。

見事な映画をお土産に、桂浜を後にして。

§ 第3回国際細胞生物学会の御案内

既に何度か準備状況を御報告しましたが、その後の進展についてお知らせします。

現在、招へいによるシンポジウムとワークショップは54セッションで、発表論文数は370編にのびます。このうちの半数以上は外国からの研究者です。

一般演題はポスター形式で5日間全日展示されますが、その数は1,350編にのびています。従って総発表論文数は、1,800編近く、かなりの規模の国際会議となることがわかりました。参加者も54ヶ国から2,000名以上が登録を済ませています。米国から最大のグループが参加するのは当然ですが、中国から50名以上、あるいはネパールからも発表があるという現象は、アジア地区にも細胞生物学の流れがおこっていることを示しているようです。

会期中に私たちはアジア・太平洋地区からの参加者集会を計画していましたが、やはり時機を得たプランだったと思います。

NHKホールにおける開会式では、日本生まれのH. S. Bennett教授（ノースキャロライナ大）が「日本の近代医科学の歴史」について話されます。

特別講演は既に御案内のとおり、毎朝1人宛、4回に分けて行われます。

細胞を中心に、一方は分子から遺伝子へ、もう一方は細胞集団、細胞社会へと考えを進展させ、細胞生物学の流れを見極め、将来に備えようというのが本会議のねらいです。

連日早朝8時半から夜間10時半までという強行軍ですが、それだけに大きな成果を期待しています。

新しいAdvance Programには発表者名も加えてあります。どうぞ御覧の上、多数の方々に参加されますようお願い致します。

第3回国際細胞生物学会議

事務局 沖垣 達

連絡先 〒160 東京都新宿区西新宿2-2-1

京王プラザホテル Rm. 3609

第3回国際細胞生物学会議

事務局 (Tel. 03-345-9383)

§ 第3回国際細胞培養会議(3rd ICCC)の御案内

既報の如く、第3回国際細胞培養会議(会長 山根 績(東北大・抗研))が3rd ICCC組織委員会と日本組織培養学会との共催で1985年9月10~13日仙台で行われます。

去る5月24日、組織培養学会の幹事に先立ち、第3回プログラム委員会が、高知市のサンルート高知で行われました。今回の会でも主としてシンポジウムの内容について討議され、第2回の委員会で決まった内容に若干の手直しが行われました。その結果は下記のとおりです。

○各シンポジウムは持ち時間を3～3.5時間としシンポジストは5人を原則とする。

○シンポジウムのテーマおよび世話人は次のとおりです。

1. 分化細胞の大量培養 山根 績(東北大・抗研)

2. 分化細胞の選択的培養

A 肝細胞 市原 明(徳島大・医)

B 藤ら氏島細胞 高木 良三郎(大分医科大)

C 血管内皮細胞 三井 洋司(東京都老人研)

D 乳腺上皮細胞 榎並 淳平(独協医科大)

E 神経系細胞 福田 潤(東大・医)

3. 新しい培養技法 大野 忠夫(放医研)

4. 細胞株の保存, 登録, 汚染およびその除去

佐藤 二郎(岡山大・医)

○詳細は本年9月中旬頃発行予定のSecond Circularに掲載いたします。

○テーマの3と4はnight sessionとし, 並行して行う。

以上の他に一般演題(ポスターセッション)を募集する予定です。

尚, お問い合わせは

〒980 仙台市星陵町4-1

東北大学抗研細胞生物部門

第3回国際細胞培養会議事務局

あてお願いいたします。

(菅 幹雄)

§ 関連学会報告

口腔組織培養研究会

口腔組織培養研究会は1963年に川原春幸(大歯大), 佐伯栄一(九歯大), 佐藤温重(東医歯大) 須田立雄(東医歯大), 真泉平治(日歯大), 吉岡 濟(兵庫医大)教授らが中心となり, 歯学領域で組織培養法を利用している人々の集いとして発足しました。以後, 毎年1回の研究発表会を行い, 本年度で21回目をむかえます。『Tissue Culture in Dentistry』のタイトルで研究会誌(英文)を発行し, 各年度の研究会の報告を掲載しております。このような活動を通じて, 我が国における歯学領域での組織培養研究に関する情報交換の場としての使命を果たしてまいりました。さらに海外における研究者との間の交流の面でもその成果を上げてきました。

1983年度の第20回口腔組織培養研究会は葛西四郎教授(東北歯科大学)のお世話により開催されました。

本年度の研究会は次の要領で行う予定です。歯学領域に関心をお持ちの方々は何卒御参加下さい。

記

第 21 回口腔組織培養研究会

日 時 : 1984 年 11 月 17 日 (土)

場 所 : 兵庫医科大学

世 話 人 : 吉岡 濟教授 (兵庫医科大学)

遺伝学関係の特別講演も予定しています。

なお、演題申し込みメ切日など詳細については吉岡濟教授または口腔組織培養研究会事務局までお問い合わせ下さい。

口腔組織培養研究会事務局

〒540 大阪市東区京橋 1-47

大阪歯科大学 歯科理工学教室

06-943-6521 内線 271 大 島 浩

§ 海外研究所紹介

W. Alton Jones Cell Science Center

Cell Science Center は、米国ニューヨーク州の北東部、森と湖の町 Lake Placid に位置しております。1980 年には冬季オリンピックが当地で開催されたので、御記憶の方々も多いかと存じます。

さて当研究所は 1971 年植物及び動物細胞の組織培養の教育・トレーニング機関として設立されました。当初米国組織培養学会が研究所運営に参画しておりましたが、82 年に研究法人として独立し、83 年には、Dr. Gordon Sato がカリフォルニア大サンディエゴ校より新所長に就任し、新生の研究所としてスタートしたばかりです。

研究所の基本的研究方針は、種々の分化機能を保持した細胞の無血清培地の開発、正常及び癌細胞の増殖・分化に影響を与えるホルモン、成長因子、又は制御因子の解明・癌細胞特異的ホルモン・レセプターに対するモノクローナル抗体の開発などです。

具体的研究プロジェクトとしては、①ヒト、ウサギ血管内皮細胞、ヒト気管支上皮性細胞、ヒト及びラット分化型肝癌細胞、ヒト及びラット前立腺上皮性細胞、ヒト-ヒトハイブリドーマ細胞の無血清培地の開発と分化形質の発現、②ラット腫瘍細胞及び正常細胞の EGF 及び HDL (high density lipoprotein) の要求性の相違、特に Apolipoprotein の要求性の解析を中心に研究が進められています。③血管内皮細胞を用いた血栓症とプロテオグリカンの合成・代謝の関係、④気管支上皮性細胞の発癌剤の代謝、⑤ヒト-ヒトハイブリドーマ細胞の選択的無血清培養に必要なミエローマ細胞の conditioned medium factor、又血管内皮細胞、前立腺上皮性細胞、及び肝癌細胞の増殖に不可欠な牛脳下垂体及び視床下部中の生理活性物質の分離・精製、⑥アンドロジエン要求性前立腺上皮性細胞のアンドロジエンレセプター遺伝子のクローニング、などです。Lake Placid は自然環境に恵まれ、全米でも有数のリゾートエリアとして知られ、夏はハイキング・カヌー、水上スキーに、又

冬はスキー、スケートとレジャー設備はいたれりつくせりの感があります。学会員の皆様も米国東部においでの際は Lake Placid にも足を伸して下さい。

研究所住所

W. Alton Jones Cell Science Center, Old Barn Road, Lake Placid,
New York 12946. U. S. A Tel. (518) 523-1274

(星 宏良)

追記：Dr. Gordon Sato が先頃、米国国立アカデミーの会員に選出されたとのニュースが、松村外志張会員を介し、上記研究所より編集部に寄せられました。以下にそれを伝える記事の一部をご紹介します。

DR. GORDON H. SATO, CELL SCIENCE CENTER HEAD,
ELECTED TO NATIONAL ACADEMY OF SCIENCES

Lake Placid, New York

Dr. Gordon H. Sato, Director of the W. Alton Jones Cell Science Center, has been elected a member of the National Academy of Sciences, the prestigious honorary society which also advises the Federal government on issues involving science and society. The election was held during the business session of the 121st annual meeting of the Academy on May 1, 1984. Dr. Sato was honored by the Academy in recognition of his original research and leadership in science. Election to membership in the Academy is considered to be one of the highest honors that can be accorded an American scientist or engineer. There are only 1,428 living members.

§ Post - Doc. Position

アメリカ組織培養学会の事務局でもある Dell'Orco 博士は、培養細胞を用いてクロマチンの構造と機能、特に、その加齢変化を研究しています。この度、下記のような研究内容と条件のもとに、Post-Doc. の留学生を求めています。関心のある方は、至急ご連絡下さい。より詳細な benefit と、年報などお渡します。

The Samuel Roberts Noble Foundation, Inc.

Route One Ardmore, Oklahoma 73401 Telephone 405/223-5810

Dear Dr. Mitsui:

The Samuel Roberts Noble Foundation has initiated a postdoctoral program, and my section has one position available. For several years my laboratory has been involved in the study of cellular aging as expressed in human diploid cells maintained in culture. More recently the primary focus of these studies has been an investigation of age related alterations in chromatin structure. This work is concentrating on the histone components and is proceeding along several paths.

Presently the on-going projects include analyses of histone post-synthetic modifications, histone variant synthesis, DNA repeat lengths, DNA accessibility to effector molecules, and histone gene dosage and expression. In filling the available postdoctoral position, I would like to recruit an individual who has a background and a continuing interest in chromatin biochemistry, particularly nuclear proteins and their influence on chromatin structure-function relationships.

If you have a graduate student who will be completing degree requirements in the near future and who you feel could contribute to our programs, I would appreciate it if you would have the individual contact me. I am enclosing a copy of our 1982 annual report and a listing of the benefit package which will be available to the successful candidate. In addition to the listed benefits, there are a limited number of housing units on the Foundation property which are available at a reasonable cost. The salary is \$18,000 per year with a two-year appointment.

If you or a potential candidate have any questions, do not hesitate to contact me.

Sincerely,



Robert T. Dell'Orco, Ph.D.
Head, Cell Biology Section
Biomedical Division

連絡先：(03) 964-1131, ext 3080

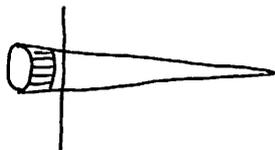
三井洋司(東京都老人総合研究所)

§ Technical Report

コロニー分離用シリンダーの簡単な作り方

東大・医科研 黒木登志夫

コロニーを分離するためのシリンダーとしては、これまでステンレス、ガラス、プラスチック製のものが利用されてきた。しかし、これらは簡単に入手できず、また紛失しやすい。最近、われわれは、ピペットチップの根本を切って用いている。すなわち、ピペッマン1000 μ l用ピペットチップ(青色)の根元を長さ5~8 mmにはさみで切り落したものである。高圧滅菌できる。少し軽すぎるくらいはあるが、ていねいに底面(チップの根元側)にシリコングリースを塗り、シャーレに少し押さえつけば、中からトリプシン液のもれることはない。200 μ l用チップ(黄色)は細すぎて使いにくい。



はさみで切る



§ 編集後記

新会長，新幹事のもと，会員通信も新たなスタッフで出発いたしました。学会は年一回となりましたが，会員通信の方は従来通り年三回発行です。どうぞよろしくご指導，ご援助のほどをお願いいたします。なお，本号には Dr. McGarrity から編集部宛に送付されて来ました米国組織培養学会編
Uses and standardization of vertebrate cell cultures 購入申し込み用紙を同封いたしました。ご利用下さい。

(T. T.)